

「作文」ではなく「書くこと」の力をつけるという発想で

東京都港区立赤坂中学校教諭
甲斐利恵子



Q 私の教室では、原稿用紙を前にするとアレルギー反応を起こし、「嫌だ」「やりたくない」と言ってしまう作文嫌いの生徒が多くて困っています。普段から生徒が楽しんで取り組めるようないいアイデアはないでしょうか。

A 子どもたちは、いつでも何かひとつのことです。中学生は、めんどくさいことは大嫌いですからね。でも、なぜアレルギー反応を起こすのかという問いを立てて、真剣に考えることは必要です。

作文なんて嫌だと思っ背景には次のようなことがあります。

- ・何を書いているのかわからない。
- ・書いたことが見つかからない。
- ・書きたいことはあるがどう書いていいかわからない。

- ・書きたしがわからない。
- ・書いているうちに何を書きたいのかわからなくなってしまう。
- ・ぴったりの言葉や表現が思いつかない。
- ・めんどくさい。
- ・書いてよかったと思えない。

などなど。これを一つ一つに対策を立てていくのは可能です。

今回は、中学生特有の「めんどくさい」「つまらない」を解消する小さな「書く」の学習を紹介します。

「作文」ではなく「書くこと」の力をつけるという発想で

「作文」といえば原稿用紙。それは行事の後などに書かせられるもの。そして長い文章。確かに楽しい経験はしたが、別に書きたいことなどない、というマイナスのイメージが子どもたちには強いようです。

作文を書く力をつけるのは大切ですが、そのよつな「作品を作り上げる」という発想ではなく、「書くこと」の力をつけるという発想をしてください。そのよつな「書くこと」によって、長い文章を仕上げるのが目的のいわゆる「作品主義」を脱却できると思います。書くことは特別なことではないと思う子どもたちを育てたいものですね。

そのためにはいつでも書いていくという環境を作る必要があります。以前、この教師力講座で紹介した授業記録(「国語教育相談室」No.56)が私の教室ではとても有効だと感じています。毎時間、必ず授業記録を

書いて、学んだことや課題や感想などを書いていく。この積み重ねは半年ほどたつと確実に書くことに対する抵抗感を少なくします。

日常的にそのような取り組みをするのと同時に、「コンバクトですぐにできる学習を今回は紹介したい」と思います。「書くこと」が楽しいと思える学習の一例です。

ウソ日記

これは私の所属している勉強会で共に学んでいる教師が考えた方法です。それを自分なりにアレンジして実践しています。

新出漢字を使って日記を書くという活動で、内容は童話「はれときどきぶた」(矢玉四郎・作、岩崎書店)

のうにウソでよいのです。とにかく、時間内にどれだけ多くの新出漢字を使えたかが鍵。多少は無理のある話の展開もOKです。ウソを書きなさいと言われて子どもたちは最初驚いていましたが、今では「ウソ日記」というと張り切って書くようになります。漢字のワークブックを持たせて書かせると便利です。

書き終わった後に作品を読んで発

使った新出漢字をここに改めて書きます。慣れないうちは全部書き終わってから、慣れてくると文章を書きながら書けるようになります。

時間内に何個書けたか個数を書きます。この時は10分とりました。

その日の日付と天気を書きます。

ウソ日記	氏名()
五月二十九日・雨	鉄声
	動揺
	凍らせた
	恐怖
	慌たたく
	銘柄
	飢え

今日の授業で学んだ漢字をここに書いておく。授業の振り返りや、自分の学習の振り返りをする。授業の振り返りや、自分の学習の振り返りをする。

使った新出漢字には傍線を付けます。

多少文章におかしいところがあっても、気にしないようにします。



言葉の小劇場

表すると、聞き手は新出漢字を頭に浮かべながら聞けるようです。ウン日記を始めてから漢字力も付いたようで、まさに「一石二鳥の学習です。」

●「色あせる」に「身にしみる」

上京してきた真央は荷物の整理をしていた。すると、アルバムなどが入っている段ボールの中から色あせた一冊の本が出てきた。昔、おばあちゃんからもらったものだ。その本をギュッと抱きしめると、温かさが身にしみた。

●「色あせる」

私の小学校の思い出は、毎日、毎日が色あざやかなものだったはずなのに、中学に入學し、日がたつにつれ、だんだんと色あせてしまっている。あんなに楽しく濃い日々だったのに…。記憶とは、儂いものである。

●「…よしもない」

二学期の始業式の朝、一年三組に転校生がやってきた。ずいぶん背が高く、先生から紹介されてもにこりもしない男子だったが、その後、野球部で僕とバッテリーを組むとは、もちろんその時は、知るよしもなかった。

言葉の小劇場

上に示したものは子どもたちが書いた「言葉の小劇場」です。これは語彙指導の一つとして取り組み始めたものですが、語彙力を身に付けると同時に書くことの楽しさも味わえる、こちらも「一石二鳥の学習です。」

言葉が身に付くというのは、辞書で意味調べをするだけで実現できるものではありません。どんな場面で使われる言葉なのかをわかり、実際に使っていてこそ身に付くものです。「言葉の小劇場」は、教材文に出ている言葉を取り上げ、その言葉を使って百字程度でお話を作るという学習です。一つの言葉に対して10分もあればできます。フィクションであればどこか違うところと全然構いません。

ここで示した「色あせる」「身にしみる」「よしもない」は、教科書教材一年「少年の日の思い出」に出ている言葉です。この作品の読みに入る前に、キーワードとなる言葉をいくつか拾って小劇場を作りな

いと指示しました。子どもたちは辞書を調べ、用例を参考にします。それでもわからないときは教師に尋ねます。教師は子どもたちから質問されたら、「例えばね」と言って想定できる場面を伝えます。いわば用例辞典のような役割ですね。私にとっ

ては、とても楽しい時間です。最初のうちは慣れない子どももいますが、書けた子どもの作品を読んでも紹介したり、印刷して読み合ったりすると、どんなふうに書けばいいのかがすぐにわかります。

書いた後に文章を読み合うことによって、自分では取り上げなかった言葉も意味や使い方がわかってきます。この学習は語彙獲得に大きな収穫をもたらしました。

書くことがめんどくさいと思っていた子どもも、いつの間にか書くようになっていました。思っていることが形になる楽しさを味わったのだと思います。

この学習は作品の読みを確かなものにするための一助ともなりました。文章の中に出てくる言葉を理解でき

真剣に取り組んでいました。

小さな「書く」という学習が読みを深めることにもなります。書かなければ先へ進めない学習でもありません。子どもたちのコメントをすぐに印

万葉集の歌に対するコメント

春過ぎて夏来るらし白栲の衣乾したり天の香具山

持統天皇

夏が来ちゃったのかあ

緑と白のコントラストが美しい

きっと空は真っ青だろうなあ

高いところから見下ろしてたの？

いい眺めだよ

女性の天皇だったのか

柿本人麻呂

東の野に炎の立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ

雄大な景色！

ナイスロケーション

夜更かしなの？早起きなの？

私もその景色見てみたい

そんな景色に出会えてラッキーでしたね

なんと地球的高い建物がない時代だ

刷して、みんなでさらにコメントを言い合うと大いに盛り上がりました。感想を書きなさいと言わなくてもいつのまにか感想を書いていたという学習です。さまざまに「書く」学習を通して、書くことへの抵抗をなくしていく。そのことも書く力を育むためには大事なことです。付箋を利用する学習はいろいろあります。「コンパクト」な学習を考えるにはとても便利な道具です。幸いなことにいろいろな大きさの付箋があるので、学習によって大きさを変えたり少し長い文章やコメントも書けるようになります。原稿用紙を嫌がらないようにするということにはまだまだ足りませんが、こういう学習を積み重ねていくことで一歩ずつ近づいていくと思えます。

三十字で、五十字で、百字で、字数を増やしていくのもいいかもしれません。「書く」力は「書く」ことによってつくものです。いろいろな学習に挑戦してみましょ。

「コンパクト」をキーワードに

小さな「書く」学習は、特別に取り立ててやらなくてもいつでもできます。たとえば「読み」の授業にもそのチャンスが多くあります。次に示したのは「コメントで読む万葉集」という単元を実践したときのものです。万葉集の一首一首に、解説が書かれている資料を読みながら、子どもたちが付箋に「コメントをひと言だけ書いて貼っていく学習です。子どもたちは「○字以上書きなさい」と言われるのではなく、「○字以上書いてはいけません」という方が書く気が